

# お母さんバチ、ツタ博士のくわくわくドット描いてくわ

国立市立国立第七小学校

平成29年10月31日 NO.64 (464)

モンタ博士「ハチの巣は、まず巣の柄から作るのさ。」

3年生 「柄の部分は特に念入りに作るんですね。」

モンタ博士「そうだね。そのあと、大きな巣を支える柄だから、強く丈夫なものにするんだ。そして、柄の下のお部屋を一つ一つ作っていくんだ。」



3年生 「うすくのばしてつつ型、つまり、カップ状の形にするんだな。かわくと、うすい紙のかべでできた部屋になるというわけですね。」

3年生 「でも、不思議だな。アシナガバチは、どんな道具を使うのかな。」

モンタ博士「そこがまた驚きなんだ。ハチたちは大あごをコテのようにしたり、触覚を定規がわりに使いながら巣づくりをするのさ。」

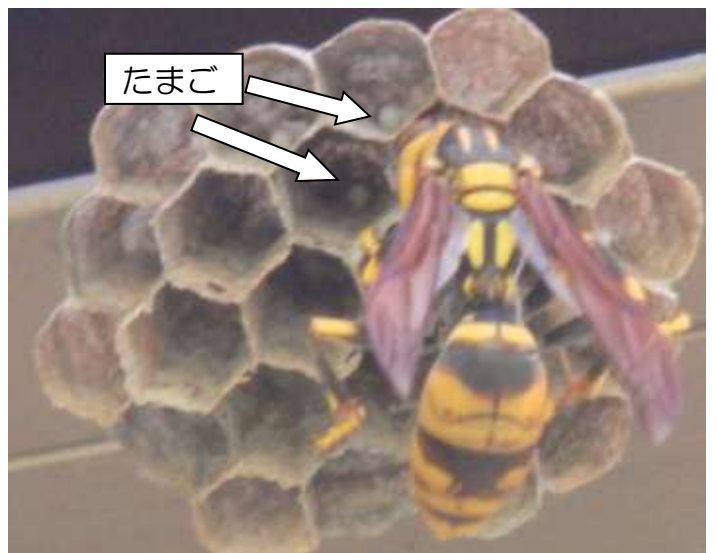
3年生 「つまり、お母さんバチの体全部が、巣づくりの道具というわけですね。」

3年生 「お母さんバチは何度も材料運びをするでしょ。それを全部、お母さんバチ1匹でやるでしょ。やっぱりお母さんはえらいなあ。」

モンタ博士「そのとおりだね。飛んでいるとちゅうに、小鳥におそわれたり、クモの巣にかかったりするかもしれないし、危険がいっぱいなんだよ。」

3年生 「つまり、お母さんバチは命がけなんだな。すごいな。」

モンタ博士「そうだね。そして、ようやく1つの巣ができると、そこでたまごを産むんだ。写真でもわかるかな。矢印のところがたまごだよ。」



3年生 「やっとたまごが産まれたんですね。めでたしめでたし。」

モンタ博士 「でも、まだまだお母さんバチのお仕事はいっぱいあるんだよ。」

3年生 「アシナガバチのお母さんは、巣作りやたまごを産んだり大忙しですね。」

3年生 「巣が大きくなったら、どうするんですか。卵がかえったらどうするんですか。」

モンタ博士 「それからがまた大忙しだ。次々に生まれてくる幼虫にえさをあげなくてはならないだろう。アシナガバチのえさはねアオムシや毛虫などの幼虫さ。」

3年生 「幼虫がえさなんですか。」

モンタ博士 「幼虫を見つけると、あごでかみくだいて、足と口で肉だんごにするんだ。」

3年生 「おしりのハリは使わないのですね。」

モンタ博士 「そうだね、ハリは、巣をまもるための武器として使うのさ。だから、むやすみに巣に近づいたりすると、さされるわけさ。」

3年生 「ハチの巣を見つけたら、そっとしておいて方がよいということですね。」



モンタ博士 「そのとおりだよ。ハチだって、巣を守るために必死なんだよ。」

3年生 「みんな生きていくために、一生懸命だということですね。」

3年生 「そうやって、働きバチは、妹のハチの幼虫たちにえさをあげるんですね。」

モンタ博士 「そうだよ。クモがあみをはっているだろうし、小鳥も目を光らせているんだ。」

3年生 「ハチたちの命がけの『子育て』が続くというわけですね。」

モンタ博士 「梅雨のころに、雨が巣の中に入ったりしたら、水をすい出したりするんだ。」

3年生 「よく働くんですね。」

モンタ博士 「それからとても暑い日には、水を巣にぬりつけて、羽を動かして風を送ったり、クーラーのようにして、ひやしたりもするんだよ。」(まだまだつづく・・・)

## アシナガバチの防犯システム

母親バチは、自分の腹部からアリの嫌う物質を出すことができます。この物質を巣のつけ根の部分に塗りつけておけば、母親バチの留守の間もアリは近づくことができません。アシナガバチの巣は、私たちには感じることでできない化学物質で守られているということです。しかし、この防犯システムの化学物質も効き目がいつまでもあるというわけではありません。何かの理由で母親バチの帰りが遅くなったりすれば、巣はたちまちアリたちにおそわれてしまいます。母親バチの巣作りはそのような危険と戦いながら行われているということです。